

ハツ場ダム住民訴訟通信-146

2019年6月25日発行

水問題の現場から



アサザプロジェクトは、湖に咲く可憐な花から始まりました。

湖の環境が悪化したことで絶滅に瀕していた水草アサザを救うために、1995年に地域の人々が立ち上がりました。

アサザを守る取り組みをきっかけに、学校や市民団体、企業、農林水産業、研究機関、行政などの多様な組織や人々が協働するネットワークが流域に広がり、湖の上流にある水源地から下流の湖まで被う様々な事業へと発展していきました。今

では、市民型公共事業と呼ばれることもあります。

アサザプロジェクトが進める自然と共存する持続可能な循環型社会づくりには、これまでに延べ32万人、200を超える学校が参加しています。(アサザ基金 HP より)

今回はアサザ基金の飯島博さんです。

隠蔽された霞ヶ浦の危機

認定 NPO 法人アサザ基金 代表理事 飯島 博

1.問題の本質を隠蔽する動きに抗して

問題の実態や本質を覆い隠し、レトリックを駆使し都合の良い情報を垂れ流してやり過ぎず悪しき相対主義がはびこり、私たちの社会や世界は現実から遊離して漂流を始め極めて危うい状況にあります。霞ヶ浦も、同じく問題の本質を覆い隠し深刻化する環境悪化を見過ごそうとする動きが、行政や研究者、市民団体によって顕在化し、湖の保全は宙に浮いています。

このような状況にあっても、私達は問題の本質から目を逸らす動きを粘り強く阻止し続け、問題解決に向けて求められる本来の政治、問題の本質を見据え既存の構造に捉われず新しい現実を生産する草の根の政治、つまり私達が生きるための政治の実現を目指していくことが必要だと感じています。

2.霞ヶ浦の深刻な問題に完全に蓋をした世界湖沼会議

昨年10月に茨城県と国際湖沼環境委員会 (ILEC) の主催で開催された第17回世界湖沼会議のテーマは、人と湖沼の共存、持続可能な生態系サービスを目指してでした。しかし、この会議では、霞ヶ浦の現状を踏まえた議論が行われることはありませんでした。アサザ基金は、会議が開催される3年前から主催者に対して、霞ヶ浦で深刻化している生

態系の悪化や福島第一原発事故による影響などをテーマとして話し合うことを再三要望して来ました。霞ヶ浦開発事業による生態系悪化や原発事故の影響を多くの関係者と共に議論し解決の道を探る場とすることを求めて来ました。特に、原発事故による水環境への影響を議論することは、世界に影響を与える事故を起こした当事国として当然の義務であると考えました。しかし、当初は論文募集のキーワードとして入れると言っていた「放射性物質」の文言さえ消されてしまい、原発事故の事実自体が会議から完全に抹消されてしまいました。

このような状況にも関わらず、会議に参加した研究者や市民団体関係者からも一切の問題提起がなかったことを残念に思うと同時に、この国の村度文化の根深さを実感させられました。

アサザ基金は、世界湖沼会議と同時につくば市でシンポジウム「私達の世界湖沼会議、本会議では語られない霞ヶ浦の真実」を開催しました。

3. 不必要な水位上昇管理によってアサザが絶滅に追い込まれた。

前回霞ヶ浦で湖沼会議（1995年）が開催された翌年から始まった霞ヶ浦開発事業の運用（水位上昇管理）によって、アサザやヨシ原、砂浜の減少が顕著となり問題化しました。アサザが絶滅寸前にまで追い込まれた2000年にアサザ基金の要望を受け国交省（当時建設省）は水位上昇管理を中断し、アサザやヨシ原の再生が見られました、しかし、国交省はアサザ基金の反対を押し切り2003年から徐々に水位を上げ始め、2006年には元の水位上昇管理に戻してしまいました。その結果、霞ヶ浦に1995年以前から記録されていたアサザ群落（全国で2花型が残り唯一種子繁殖が可能な群落）が昨年ついに全て消滅し、霞ヶ浦のアサザは事実上の絶滅状態に陥りました。（全国に残るアサザ群落は全て種子を生産できないクローンです。）

霞ヶ浦開発は何をもたらしたにか

茨城県水道用水の余剰水量	日量 74 万トン
工業用水の余剰水量	日量 80 万トン
都市用水の余剰水量	日量 154 万トン

※霞ヶ浦開発による開発水量の56%は使われていない。

人口減少と余剰水量

2025年度の茨城県想定人口	276万人
2025年度の茨城県の保有水源	603万人分
余剰水量を加えると	832万人分



ハツ場ダムをストップさせる茨城の会 代表:濱田篤信 船津寛
事務局:神原禮二 〒302-0023 取手市白山 1-8-5 携帯:090-4527-7768